

2011年 10月9日・毎日新聞「今週の本棚」欄では

ランボー追跡 尾崎寿一郎著（コールサック社・2100円）

「ランボー」の名は、いまも、ある種の魔力的な響きを伴っている。一九世紀フランスの謎めいた早逝詩人。堀口大學、小林秀雄、井上究一郎など多くの詩人、文学者が難解な彼の詩に挑み膨大な翻訳や論考を残した。先学たちの論考を前提に、著者は「詩とは生きざまである」と思い定めて、魔力の正体に迫る。

権威とされてきた論考を、否定し、乗り越え、ランボーが体現した「内なる他者」「見者」の内実を、自分の感性で見極めようとする。日本のランボーと呼ばれた伝説的詩人、逸見猶吉の詩に取りつかれるように研究を重ねた手法が、ここでもみられる。「フランス語には暗愚」と自認しつつ、大佛次郎著『パリ燃ゆ』などを手掛かりにランボーの素顔を追うプロセスが興味深い。（義）

と紹介されています。